

定時制高等学校におけるアウトリーチ型キャリア教育の効果検証

—— 元アスリートのロールモデルの機能に着目して ——

岡田 悠佑¹⁾ 根本 想²⁾ 乳井 勇二³⁾ 木浪龍太郎⁴⁾

Verification of the Effectiveness of Outreach-type Career Education in Part-time High Schools:

Focusing on the Functions of Former Athletes' Role Models

Yusuke Okada So Nemoto Yuji Chichii Ryutaro Kinami

Abstract

In this study, we developed a practical model of Outreach-type Career Education for evening high school students, who are said to have difficulty in realizing career education leading to “Social and Vocational Independence”, and evaluated its effects as a “Role Model”.

As a results, regarding “Career Awareness”, no significant changes could be confirmed for any factor (Interpersonal Relationship $F(1, 18) = -2.03$: Information Utilization $F(1, 18) = -1.47$: Future Planning $F(1, 18) = -1.37$: Decision Making $F(1, 18) = .09$). Furthermore, for “Career Resilience,” only “Continuous Coping” and “Optimistic Coping” were significantly improved (Long-term Outlook $F(1, 18) = .61$: Multifaceted Life $F(1, 18) = 2.00$: Continuous Coping $F(1, 18) = -2.33, p < .05$: Optimistic Coping $F(1, 18) = -2.18, p < .05$: Reality Acceptance $F(1, 18) = -.77$). The results suggest that this program may be career education with vocational significance. Finally, regarding “Role Models”, the subjects of this study could be classified into the types “for the time being”. Therefore, it was suggested that the direction of improvement would be to introduce preparatory guidance and interaction scenes so that the lecture could be understood as a more familiar person.

Key words: social and professional independence, special activities, career consciousness, career resilience

キーワード: 社会的・職業的自立, 特別活動, キャリア意識, キャリアレジリエンス

I 緒言

1 定時制高等学校におけるキャリア教育の重要性と課題

1990年代以降の社会構造の変化に伴う若者の

失業率の高まり、フリーターや非正規雇用者の増加等を背景に、中央教育審議会(2011)は、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」(中央教育審議会、2011)を

1) 明治学院大学心理学部教育発達学科
2) 育英大学教育学部教育学科スポーツ教育専攻
3) 目白大学短期大学部ビジネス社会学科
4) 福岡大学スポーツ科学部

意味するキャリア教育の重要性を示した¹⁾。さらに、キャリア教育が育成を目指す基礎的・汎用的能力として、「人間関係形成・社会形成能力」、「自己理解・自己管理能力」、「課題対応能力」、「キャリアプランニング能力」の4つの能力が示された。しかし、特に不登校経験や退学経験のある生徒が多く在籍する定時制高等学校（以下、定時制高校）では、このようなキャリア教育を通して貧困の再生産を抑止する機能が期待される一方で、「社会的・職業的自立」を目指したキャリア教育の実現が困難であることが指摘されている（村上・小泉、2019）。その理由としては、定時制高校の生徒の卒業後の進路が多様であること（耳塚、2000）、中途退学や不登校の経験によって自己肯定感が低い生徒が多いこと（磯田、2009）、家庭環境が複雑な生徒が多く在籍していること（遠野・酒井、2019）が挙げられている²⁾。そのため、定時制高校の実態に即したキャリア教育の指導方法の開発が求められている。

2 アウトリーチ型キャリア教育の可能性と課題

前述の通り、文部科学省がキャリア教育の重要性を示して以降、その具体的な方法の開発が進められてきた。本研究の対象とする高校生のキャリア教育については、インターンシップ等の「職業教育系」、授業と関連付けた「教科目系」、大学からの出前授業等の「高大接続系」、進路指導と関連付けた「進路指導系」等の方法が開発されてきた（奥田、2019）。これらの方法の中でも、特にインターンシップや職業体験等の生徒の将来像や理想像となる人との接触経験を伴う「職業教育系」は、卒業後の「社会的・職業的自立」に効果的であることが示されている³⁾。このような講師を招聘して行うアウトリーチ型キャリア教育では、講師となる人物が生徒にとっての将来像や理想像となるような好ましい振る舞いを示す「ロールモデル」⁴⁾としての機能を果たすことが期待されている。特に、社会構造の変化に伴う価値観の多様化

を前提とした近年のキャリア教育において、「ロールモデル」の機能への期待は大きい。しかしながら、溝口(2021)によると、その機能については十分に検討されていないのが現状であるという。

3 本研究の目的

そこで本研究では、定時制高校の生徒を対象にアウトリーチ型⁵⁾キャリア教育の実践モデルを開発し、その効果を「ロールモデル」の機能という視点から検討することを目的とする。前述の通り、「社会的・職業的自立」につながるキャリア教育の実現が困難と言われる定時制高校の生徒を対象にした実践モデルの開発は重要な課題である。また、2021年に東京で開催されたオリンピック・パラリンピック競技大会（以下、オリ・パラ大会）に向けて普及が推進されたオリンピック・パラリンピック教育（以下、オリ・パラ教育）では、アウトリーチ型キャリア教育が実際に行われており（根本、2015；宮崎、2019）、汎用性が高い指導方法の開発につながると考えられる⁶⁾。

II 研究方法

1 講師の選定

アウトリーチ型キャリア教育では外部講師の選定が必要となるが、どのような外部講師であれば「ロールモデル」の機能が期待できるのであろうか。この点について家島(2006)は、自己の生き方についての「ロールモデル」となる人物の条件として、同一の性別、関係性、実現可能性の3点を挙げている。つまり、講師となる人物との共通点に基づく心理的な距離感がロールモデルの機能に影響するということである。ただし、キャリア形成における「ロールモデル」の機能には、このような自分の理想とする特定の人物から影響を受けるという正のモデルだけでなく、特定の人物のようにはなりたくないという負のモデルも存在する（溝口・溝上、2020）。このことは、外部講師

が決して自己の理想とする存在でなくても、類似するうまくいかなかった経験を有する人物であれば、「ロールモデル」としての機能が期待できることを意味する。

そこで本研究では、高校卒業後にJリーグのチームに所属し、プロサッカー選手として約9年間活動し、引退後は転職活動を経て一般企業に就職した元アスリートA氏を外部講師として選定した。A氏と定時制高校の生徒の共通点は、キャリア形成の困難の経験である。A氏をはじめ、一般的にアスリートは、競技に専念する必要がある一方で活動できる期間が短く、引退後のセカンドキャリアの形成に困難を抱えることが多い(豊田、1999: 小島、2008: 阿部ほか、2021)。A氏も、引退後のキャリア形成に不安を抱えながら競技生活を送り、引退後の転職活動でも様々な困難を抱えながら仕事に就いた経験を有している。一見、全く異なるキャリアを歩んでいるように見えるA氏と定時制高校の生徒であるが、キャリア形成の困難という共通点があることから、ロールモデルの機能が期待できる。なお、この共通点については、講演の始めの自己紹介の中で担当の教員より説明された。

2 講演会の内容

キャリア講演会の具体的な内容は、筆者とA氏、

そして研究対象とした県立X商業高等学校(以下、X高校)の定時制課程に在職する教員B氏の3名で協議して表1の通りに決定した。協議では、筆者から上記の共通点を強調することの重要性を示し、B氏からは定時制高校の生徒たちの実態として実際に生徒たちが自らのキャリア形成に不安を抱えていることや自信がない生徒が多いこと等の情報が共有された。そのうえでA氏のキャリアの中から生徒に理解できそうなエピソードを抽出した。なお、講演会は新型コロナウイルス感染拡大の影響で、オンライン(Zoom)を活用して行った。

3 対象

X高校の定時制課程に在籍する2年生8名、3年生10名の計18名を対象とした。なお、アンケートの回収率は100%(18/18)であった。

4 収集データ

本研究では、元アスリートによるアウトリーチ型キャリア教育の効果を検証するために、実践の前後でキャリア意識とライフキャリアレジリエンスに関する質問紙調査を実施した。前者については、前述の中央教育審議会の答申で示されたキャリア教育で育成が期待される4つの能力・態度が測定可能な「キャリア意識尺度」(新見・前田、

表1 講演会の概要

テーマ	内 容
アスリートになるまでの成功体験	<ul style="list-style-type: none"> ・中学校及び高等学校で全国大会出場 ・U-18日本代表として世界選手権出場 ・強化指定選手として高校生でJリーグの試合出場等
キャリア形成への不安	<ul style="list-style-type: none"> ・出場機会が得られず移籍を繰り返す ・キャリアへの不安
引退の決断と転職活動での苦悩	<ul style="list-style-type: none"> ・一般企業で使える能力が不足している自分への気づきと後悔
初職での苦悩	<ul style="list-style-type: none"> ・業務内容や給料等の情報収集を十分にせずに就職 ・仕事で失敗の連続 ・年下の上司との人間関係の苦悩 ・仕事量と給料の不均衡
転職活動	<ul style="list-style-type: none"> ・自分に合う仕事の探索
現在の仕事への向き合い方	<ul style="list-style-type: none"> ・何ごとにも挑戦することを重視

2009)を採用した。質問項目は、人間関係形成(10項目)、情報活用(11項目)、将来設計(12項目)、意思決定(9項目)の4因子42項目で構成されている。後者については、「不安定な社会の中で自らのライフキャリアを築き続ける力」(高橋、2015、p.149)を測定可能な「ライフキャリアレジリエンス尺度」(高橋、2015)を採用した。近年のキャリア教育が生涯にわたるキャリア形成を意味するライフキャリアを前提にしており、それゆえに『職業生活を思うように生きる』ためのキャリア教育ではなく、たとえ思うように生きられないことがあっても自らのライフキャリアを生き抜く」(高橋、2015、p.149)ことも重要である。なお、質問項目は、長期的展望(9項目)、多面的生活(5項目)、継続的対処(7項目)、楽観的対処(4項目)、現実受容(3項目)の5因子28項目で構成されている。なお、回答はどちらも6件法で求めた。

さらに本研究では、実践の効果がロールモデルの機能を媒介としている可能性を検討するために、実践後にロールモデルに関する質問紙調査を実施した。前述した通り、効果的なロールモデルの機能には正のモデルだけでなく負のモデルも存在するため、外部講師をどのようなロールモデルとして理解したかという観点に基づく分析が求められる。そこで、尺度の信頼性・妥当性が確認されている「ロールモデル尺度」(溝口・溝上、2021)を採用した。質問項目は、尊敬・理想像(8項目)、視野の広がり(7項目)、支援・助言(7項目)、行動の手本(3項目)、回避(5項目)の5因子30項目で構成されている。なお、回答は5件法で求めた。

5 分析方法

実践前後に収集したキャリア意識尺度及びキャリアレジリエンス尺度については、回答を得点化して(「とてもそう思う=6点」、「そう思う=5点」、「ややそう思う=4点」、「ややそう思わない

=3点」、「あまりそう思わない=2点」、「そう思わない=1点」)、平均値を算出したうえで、事前×事後の対応のある t 検定を行った。

さらに、実践後に収集したロールモデル尺度については、回答を得点化して(「そう思う=5点」、「ややそう思う=4点」、「どちらともいえない=3点」、「あまりそう思わない=2点」、「そう思わない=1点」)各因子の平均値を算出したうえで、項目間の多重比較を実施した。そして、溝口・溝上(2021)で示されている各タイプの特徴と比較して本研究の対象者がA氏をどのようなロールモデルとして理解したかを検討した。なお、全ての統計処理はSPSSver.25で行った。

6 倫理的配慮

X高校の教員Bに対して、本研究の目的や意義を伝え協力を依頼した。その際、アンケートへの回答は強制ではないこと、個人が特定されることはないこと、そして研究以外の目的で使用しないことを伝え、研究への協力に関する承諾を得た。さらに、実践を行う前に、生徒に対しても同様の説明をしたうえで、アンケート調査へ匿名で回答を求めた。なお、本研究の実施に関して、事前に第一著者の所属先の大学の倫理審査で承認を得た。

III 結 果

1 実践前後の変化

実践前後に実施した「キャリア意識」及び「キャリアレジリエンス」に関する質問紙調査の結果は、表2の通りである。

「キャリア意識」については、全ての因子で有意な変化は確認できなかった(人間形成 $F(1, 18) = -2.03$: 情報活用 $F(1, 18) = -1.47$: 将来設計 $F(1, 18) = -1.37$: 意思決定 $F(1, 18) = .09$)。次に、「キャリアレジリエンス」については、「継続的対処」及び「楽観的対処」のみ有意な向上が確認できた(長期的展望 $F(1,$

表2 実践前後の変化

実践	pre		post		t-value
	M	SD	M	SD	
キャリア意識					
人間関係形成	4.27	.84	4.48	.61	-2.03
情報活用	4.22	.49	4.41	.37	-1.47
将来設計	4.00	.56	4.11	.51	-1.37
意思決定	4.16	.89	4.15	.75	.09
キャリアレジリエンス					
長期的展望	4.75	.64	4.70	.57	.61
多面的生活	5.10	.68	4.87	.56	2.00
継続的対処	3.39	.86	3.66	.90	-2.33*
楽観的対処	3.54	1.18	3.86	1.04	-2.18*
現実受容	3.93	.78	4.06	1.01	-.77

* $p < .05$

18) = .61 : 多面的生活 $F(1, 18) = 2.00$: 継続的対処 $F(1, 18) = -2.33$, $p < .05$: 楽観的対処 $F(1, 18) = -2.18$, $p < .05$: 現実受容 $F(1, 18) = -.77$ 。

2 ロールモデルの機能

実践後に実施した「ロールモデル」に関する質問紙調査の結果と項目間の多重比較の結果は、以下の通りである(表3、表4)。

表3 ロールモデル尺度の基本統計量

実践	pre		post		t-value
	M	SD	M	SD	
キャリア意識					
人間関係形成	4.27	.84	4.48	.61	-2.03
情報活用	4.22	.49	4.41	.37	-1.47
将来設計	4.00	.56	4.11	.51	-1.37
意思決定	4.16	.89	4.15	.75	.09
キャリアレジリエンス					
長期的展望	4.75	.64	4.70	.57	.61
多面的生活	5.10	.68	4.87	.56	2.00
継続的対処	3.39	.86	3.66	.90	-2.33*
楽観的対処	3.54	1.18	3.86	1.04	-2.18*
現実受容	3.93	.78	4.06	1.01	-.77

* $p < .05$

表4 項目間の多重比較

①尊敬・理想像	②視野の広がり	③支援・助言	④行動の手本	⑤回避	F値	多重比較
2.94 ± .79	3.52 ± .72	3.40 ± .49	2.83 ± .66	2.71 ± .97	4.16	⑤<②

このように、「視野の広がり」が最も高い数値を示し、続いて「支援・助言」、「尊敬・理想像」、「行動の手本」、「回避」の順に高い得点となり、「視野の広がり」と「回避」との間に有意な差が確認できた($F(1, 18) = 4.16 < .01$)。これらの結果は、溝口・溝上(2021)の5つのタイプと比較すると、「とりあえずタイプ」に該当する。

IV 考察

1 「継続的対処」と「楽観的対処」の向上の理由

本研究では、「キャリアレジリエンス尺度」の「継続的対処」と「楽観的対処」の2つの因子が実践前後で有意に向上した。前者は、目先のことに安心せず、常に先を読んで新しいチャンスを逃さないだけでなく、うまくいかない場合にも適切に対処できる態度を意味する。後者は、特にうまくいかないときに状況を前向きに捉えて何とかすると理解することを意味する態度を意味する。これらの一見相反する因子の向上の要因をA氏の講演の内容と関連付けて考えると、次の通りである。A氏は講演会の中で、プロになって移籍を繰り返すまで自分の将来的なキャリアを考えずにサッカーを続けてきたことや初職を選択する段階で十分な検討を行わなかったことを反省的に語っていた。しかし同時に、このようなキャリア形成の準備には限界があり、いくら過去を振り返っても仕方がないため、結局のところ何ごともしやってみないとわからないという姿勢を持っていたことも語っていた。A氏の就職活動におけるこのような葛藤が、「継続的対処」と「楽観的対処」という一見相反する2つの意識の醸成に影響したことが推察される⁷⁾。

教育機関におけるキャリア教育は、仕事の現実の理解を通じた職業への適応を促す一方で、不当な労働条件・労働環境を改善するという抵抗の側面が軽視され、結果的に職業への適応がうまくいかない場合に自己責任に結び付けられるという危険性を孕んでいることが指摘されている（本田、2009；児美川、2013）。この点を踏まえると、本研究において就職活動における葛藤から「継続的対処」と「楽観的対処」という「キャリアレジリエンス」が高まったことは、元アスリートによるキャリア講演会が、職業的意義のあるキャリア教育となる可能性を示唆している。

2 講師の選定の問題

「ロールモデル尺度」の分析の結果、本研究の対象者は「とりあえずタイプ」に分類できた。つまり、A氏を自分の理想とするわけでもなく、かといって反面教師とするわけでもない存在として理解したということである。このような結果は、対象者にはA氏から何らかの情報を得て自らの行動の指針とするという態度が形成されなかったことを意味しており、A氏がロールモデルとしての機能を十分に果たさなかった可能性が示唆される。このような問題の解決策としては、2つ考えられる。1つは、よりロールモデルの機能が期待できる講師を選定することである。本研究では、家島（2006）が示した「ロールモデル」の条件の一つである関係性という観点から、対象者が抱えるキャリア形成の困難という経験を共有するA氏を選出したが、対象者にとっては身近な存在として理解できなかつた可能性が高い。このような問題の解決策としては、定時制高校の生徒の特性と共通する経験等を有する講師の選定が必要であろう。ただし、このような講師の選定に関しては、生徒のニーズの多様性や講師依頼の実現可能性等を考慮すると容易でないことは推察できる。そのため、もう1つの解決策として、どのような講師でも対象者が「ロールモデル」として理解可能な

支援方法の開発が必要となる。特に事前学習として講師について知る機会を作ったり、キャリア講演会の導入場面で講師との関係構築につながる活動を取り入れることが考えられる。今後の課題としたい。

V まとめ

本研究では、「社会的・職業的自立」につながるキャリア教育の実現が困難と言われる定時制高校の生徒を対象にアウトリーチ型キャリア教育の実践モデルを開発し、その効果を「ロールモデル」の機能という視点から検討することを目的とした。その際、中央教育審議会（2011）で示されたキャリア教育で育成が期待される4つの能力・態度を測る「キャリア意識尺度」（新見・前田、2009）、自らのキャリアを築き続ける力を測る「ライフキャリアレジリエンス尺度」（高橋、2015）、そしてロールモデルの機能を測る「ロールモデル尺度」（溝口・溝上、2021）の3つの尺度で効果を検証した。

本研究の結果は次の通りであった。「キャリア意識」については、全ての因子で有意な変化は確認できなかった（人間形成 $F(1, 18) = -2.03$ ：情報活用 $F(1, 18) = -1.47$ ：将来設計 $F(1, 18) = -1.37$ ：意思決定 $F(1, 18) = .09$)。「キャリアレジリエンス」については、「継続的対処」及び「楽観的対処」のみ有意な向上が確認できた（長期的展望 $F(1, 18) = .61$ ：多面的生活 $F(1, 18) = 2.00$ ：継続的対処 $F(1, 18) = -2.33$, $p < .05$ ：楽観的対処 $F(1, 18) = -2.18$, $p < .05$ ：現実受容 $F(1, 18) = -.77$)。その結果から、元アスリートによるキャリア講演会が職業的意義のあるキャリア教育となる可能性が示唆された。最後に、「ロールモデル」については、本研究の対象者を「とりあえずタイプ」に分類できた。そのため、本研究ではロールモデルが十分に機能しなかつたことが推察された。そのため、A氏をよ

り身近な存在として理解できるように、事前指導や交流の場面を導入するという改善の方向性が示唆された。

【注】

- 1) 日本におけるキャリア教育の変遷については、高橋ほか(2018)等に詳しい。
- 2) 普通科の高校におけるキャリア教育の実態について、計画的な実践の定着が進んでいる一方で、教員の意識は低いことが指摘されている(国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター、2013)。
- 3) キャリア教育における体験的活動の効果については、その有効性について検討の余地があることが指摘されており(松本ほか、2014)、効果検証の方法の妥当性の問題(遠藤・酒井、2019;高橋、2015)や実践デザインの問題(奥田、2019)も指摘されている。
- 4) ロールモデルは、「個人が人生の中で、職業や生き方・人生について考える際、影響を受け、参考にしたあるいは参考にしたいと思う人物」(溝口、2021、p.377)を意味する。高校生を対象としたアウトリーチ型キャリア教育の先行研究では、希望する企業におけるインターンシップ(松田、2010;橋本ほか、2011)や大学の出張授業(白井、2015)がキャリア形成に効果的であることが示されている。
- 5) 「手を伸ばすこと、差し伸べること」を意味する「アウトリーチ(outreach)」を語源とする「アウトリーチ」実践は、ある特定の分野の専門家がその分野に触れる機会の少ない人々に働きかけ、その分野の普及に貢献するための活動を意味する(林、2013)。
- 6) 本研究のような体育・スポーツアウトリーチ実践としてのキャリア教育は、大会後の継続的なオリ・パラ教育としても重要な実践である(佐藤、2019)。
- 7) 若者のトランジションに関する研究では、典型的なキャリアを逸脱したノンエリート青年が、その都度ネットワークを作りながら職業選択をしていく柔軟性とも不安定とも言える若者の実態を明らかにしている(上原、2014)。このような先行研究を踏まえると、本研究で対象とした定時制高校の生徒が「継続的対処」を重視しながら、「楽観的対処」も身につけたことは、重要な成果であると考えられる。

【引用・参考文献】

阿部拓真・木村和彦・醍醐笑部・作野誠一(2021) アスリート・キャリアに関する国内研究の動向と課題。体育・スポーツ経営学研究, 34: 1-23.

- 遠藤野ゆり・酒井理(2019) 進路多様校における主体的キャリア選択に向けたキャリア教育。生涯学習とキャリアデザイン, 16(2): 159-172.
- 中央教育審議会(2011) 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について。 https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/giji/_icsFiles/afildfile/2011/02/22/1302048_1.pdf, (参照日 2022年7月7日)。
- 橋本祐・森山智彦・浦坂純子(2011) 複合的なキャリア教育の有効性。社会政策, 3(3): 140-148.
- 林睦(2013) 音楽教育におけるアウトリーチを考える。音楽教育実践ジャーナル, 10(2): 6-13.
- 家島明彦(2006) 理想・生き方に影響を与えた人物モデル。京都大学大学院教育学研究科紀要, 52: 280-293.
- 磯田宏子(2009) 養護教諭の職務としての禁煙教育。人間文化研究科年報, 24: 213-224.
- 小島一夫(2008) あるアスリートのキャリアトランジションに伴うアイデンティティの再体制化について。つくば国際大学研究紀要, 14: 73-84.
- 国立教育政策研究所(2013) キャリア教育・進路指導に関する総合的実体調査第一次報告書。 https://www.nier.go.jp/shido/centerhp/career_SogotekiKenkyu/, (参照日 2022年10月10日)。
- 松田光一(2010) 高等学校におけるキャリア教育の可能性。北海学園大学学園論集, 143: 31-66.
- 松本高宜・松尾智晶・伊吹勇亮(2014) 「活動あって学びなし」の検証。高等教育フォーラム, 4: 17-28.
- 耳塚寛明(2000) 進路選択の構造と変容。樋田大二郎・耳塚寛明・岩木秀夫・荻谷剛彦編, 高校生文化と進路形成の変容。学事出版, pp.79-80.
- 宮崎明世(2019) 学校におけるオリンピック・パラリンピック教育の展開と評価。体育学研究, 64: 855-868.
- 溝口侑(2021) キャリア形成支援におけるロールモデルの機能と関係性。京都大学大学院教育学研究科紀要, 67: 375-388.
- 溝口侑・溝上慎一(2020) 大学生のキャリア発達とロールモデルタイプの関係。青年心理学研究, 32: 17-36.
- 村上敏之・小泉令三(2019) 定時制高校生対象の「キャリア発達のための社会性と情動の学習(SEL-8Career)プログラム」の開発と試行。福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻(教職大学院)年報, 9: 123-130.
- 根本文雄(2015) 特別支援教育におけるオリンピック教

- 育の実践. スポーツ教育学研究, 34(2): 39-44.
- 新見直子・前田健一 (2009) 小中高校生を対象にしたキャリア意識尺度の作成. キャリア教育研究, 27: 43-55.
- 奥田純子 (2019) 高校におけるキャリア教育・職業教育の効果に関する研究動向. 北陸大学紀要, 47: 37-56.
- 佐藤豊 (2019) 学校体育におけるオリンピック・パラリンピック教育の充実に向けて. 日本体育学会大会予稿集, 70: 37.
- 白井利明 (2015) 高校生のキャリア・デザイン形成における回想展望法の効果. キャリア教育研究, 34: 11-16.
- 高橋美保 (2015) ライフキャリア教育プログラムの開発. 東京大学教育学部カリキュラム・イノベーション研究会編, カリキュラム・イノベーション. 東京大学出版会. pp.147-161.
- 高橋美保・石津和子・森田慎一郎・石橋太加志・安田節之 (2018) 高校生に対するライフキャリア教育のプログラム開発とその効果評価. 東京大学大学院教育学研究科紀要, 58: 595-604.
- 豊田則成 (1999) アスリートの競技引退に伴うアイデンティティ再体制化に関する研究. スポーツ教育学研究, 19(2): 117-129.
- 上原健太郎 (2014) ネットワークの資源化と重層化. 教育社会学研究, 95: 47-66.
- 山崎保寿・酒井郷平・田中奈津子・中村美智太郎・島田桂吾・三ツ谷三善 (2016) アウトリーチ型キャリア教育の実践に関する研究. 静岡大学教育研究, 12: 25-37.

(2024年1月25日受理)